



対がん協会報

1部77円(税込み)

第768号

2026年(令和8年)
7月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0045 東京都中央区築地5-3-3 築地浜離宮ビル7階
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な 内容	3面	日本対がん協会、新常務理事に 桑山氏
	5面	世界禁煙デー、ハリー杉山さんが 語る父とタバコ
	6面	RFLマイ・オンコロジー・ドリーム 奨励賞授賞式を開催

JAPAN CANCER SURVIVORS DAY 2026

がん患者を孤立させない「痛み」の支援のあり方は

日本対がん協会主催

がん治療と療養生活に関する支援情報を提供するイベント「JAPAN CANCER SURVIVORS DAY 2026」(ジャパン キャンサー サバイバーズ デイ、日本対がん協会主催)が6月7日、東京・築地の国立がん研究センター研究棟で開かれた。9回目となる今回は「痛み」がテーマ。来場した約320人は、専門家による講演やがん経験者の体験のトークセッションを通じ、必要な支援のあり方を考えた。

▼2面＝がん経験者が語る「一人暮らしの悩み」

この日は、開会あいさつで日本対がん協会の垣添忠生会長が「身体の痛みは手術とか抗がん剤などで医学的に対処できるが、こころの痛みで、がん患者が孤立することがあってはいけません」と述べた。

基調講演では公益財団法人がん研究会有明病院の佐伯吉規・腫瘍精神科医長が、「がん患者さん・ご家族のこころとからだの『痛み』～がまんしないために知ってほしいこと～」と題して話した。佐伯医長は身体的苦痛、心理的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインからなるがんに伴う「トータ



佐伯吉規医長

ルペイン(全人的苦痛)」について解説。「身体的な痛みはイメージしやすいが、患者が抱える痛みはほかに、不安、気持ちの落ち込みのような『こころの痛み』、収入減少、経済的な負担、孤独感などの『社会的な痛み』、自分の存在とは何かという実存的なスピリチュアルな痛みがある」と話し、相互に影響しあうさまざまな痛みを周囲の支えのなかで緩和する必要性を説いた。

わたしがわたしであるために

スピリチュアリティとは何か——。この問いの答えについては、埼玉医科大学総合医療センターの儀賀理暁教授(緩和医療科・呼吸器外科)が、催し後半の「いのち」と「スピリチュアリティ」と「わたし」～全人的ケアを再考する～」と題した講演で参加者とともに考えた。

儀賀教授は講演で、閉塞性細気管支炎を発症し、父

と母からの生体肺移植を受けた10代女性とのエピソードを語り、「(女性は)どれだけのことを諦め、どれだけの気の喪失を重ねたか」と語った。移植手術前に人工呼吸器を外した女性から言われた「自分の足で歩きたい」という一言には女性の勇気を思うと今でも心が熱くなるという。



儀賀理暁教授

この体験を通して伝えたいこととして、病気が治ることと同じくらいに、家族、人生に対するケアに目を向けることが重要になると強調し、「がんという病気がでてきた時に治療のことが人生の大部分をしめて主役になりがち。でも本当は、二度と戻ってこない『わたし』という物語のなかでの病の意味こそが本来考えるべきこと」と述べた。

その上で、スピリチュアリティの意味を「『わたし』の声を誰かに持ってもらうことも大事。意味が読み手に立ち現れるひらがなの『わたし』こそが『スピリチュアリティ』で、わたしがわたしでいられないことが『スピリチュアルティペイン』」と説明した。講演では、儀賀教授による弾き語りのギター演奏も披露された。



佐伯吉規教授は、がん患者・家族が抱えるさまざまな「痛み」について講演で話した。



会場ロビーには16の団体・企業のブースが並んだ。

仕事の不安・身元保証人… 一人暮らしの治療の悩み共有



催しの後半では、3人のがん経験者の体験などをもとに
専門家を交えて悩みについて話し合った。

「JAPAN CANCER SURVIVORS DAY 2026」では、がん経験者との対話をネットで発信するNPO法人「がんノート」との共催トークセッションで、3人のがん経験者の体験などをもとに「ひとり暮らしでのがん治療」の悩みについて話し合った。

セッションでは冒頭で、がん患者・家族のサロン「石川県がん安心生活サポートハウス」のスタッフで、ソーシャルワーカーの久村和穂さんが、一人暮らしが増えている現状についてデータを用いて解説。久村さんによると、終末期医療に関する悩みは特に深刻になりやすく、身元保証人のことや「看

取られないのでは」といった不安が多いという。

「身元保証人を頼めないで、入院治療は控えている」。そんな一人ひとりの個別の悩みに日々向き合う久村さんは「同じような立場のひとと集まることが心の支えにもなる。悩みを多くの医療者、支援者と共有し、支援の仕組みを整えていく必要がある」と語った。

トークセッションでは、3人の乳がん、子宮頸がん、上咽頭がん経験者が登壇。「通院のたびに『ご家族はいませんか』と言われて精神的に落ち込んだ」「フリーランス

の仕事なので、休むと仕事にいつ復帰できるのか読めなかった」など、それぞれの悩みを共有し合った。

悩みが募ったら相談を

会場ロビーでは16の団体・企業のブースが出展、写真展やパネル展示も行われ、訪れた人たちにぎわった。日本対がん協会の石田一郎常務理事は催しの終わりに、「日本対がん協会は、がんサバイバー・クラブなどの患者支援の取り組みを通じて、ご参加の皆様へ寄り添っていきたく願っています。悩みの相談やつながりたいという思いが募った時、いつでもご活用ください」と話した。

この日の模様は8月以降、YouTubeで動画配信される。



会場で開かれた写真展

がん経験者がみる世界を広く伝える 子宮頸がんサバイバーのカメラマン

木口マリさん (51)



「命と向き合っているから、がん患者や医療関係者がみている世界は普段の風景も違う」。サバイバーズデイの会場でカメラを抱えて動き回っていた木口さんは、子宮頸がん経験者のカメラマンとしてがん患者や

医療者が撮影する写真を展示会で伝えている。

埼玉県出身。アメリカのロサンゼルスで映画製作を学んだ。帰国後は会社員として働いているなかで、アートにかかわる仕事に就きたいと、写真学校に通って33歳でカメラマンとしての活動をスタートさせた。

子宮頸がんは2013年に告知を受けた。出血があって病院にかかったが、子宮や卵巣などを摘出する告知

を受けて「食べ物が食べ物に見えなかった。のどを通らないほどのショックを受けた」。

手術を受けるなど1年かけて治療した。入院中に病院で看護師、医者、患者やその家族・友人が撮る写真展を開いた。それが、いまのがん関係者が写真で想いを伝える「がんフォト＊がんストーリー」の活動のきっかけとなった。治療中は重いカメラを持つのも大変だったが、スマホで写真を撮っていたところ、看護師との会話のなかで病院側が写真展を進めてくれた。

病床の様子、野に咲く花々、見上げた空…。サバイバーズデイの会場では、「小さなつながり、大きなチカラ」をテーマにがん患者らの27点の写真を展示していた。「患者や医療者たちが映す写真は多くが日常の一コマで、心情も映している」

展示される写真には撮影者のメッセージが添えられる。「今は患者じゃなくても、こうした日常は多くのひとが通る道。病院に来て、がんになっても生活は続いていく。がんの悪いイメージを少しでも前向きにしたい」

新常務理事に桑山朗人氏 新理事に菅野氏・高橋氏・角田氏

評議員会
で承認

日本対がん協会の評議員会が6月19日に開かれ、2025年度の事業報告と決算が承認された。役員人事では、任期満了で退任する石田一郎常務理事の後任で、新たな常務理事として日本対がん協会の桑山朗人氏の選任が承認された。また、新たな理事にあずさ監査法人専務理事の菅野雅子氏、日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事の高橋都氏、朝日新聞社代表取締役社長の角田克氏が就いた。

新たな評議員には、東日本旅客鉄道常務取締役役の中川晴美氏、朝日新聞社取締役役会長の中村史郎氏が就いた。任期は理事・監事が2年間で、評議員の任期は4年間。役員(理事、監事)と評議員の一覧は以下の通り。

■役員(理事、監事)、評議員(50音順、敬称略、役職は6月24日現在)

◇代表理事・会長 垣添忠生(国立がんセンター名誉総長)

◇代表理事・理事長 梅田正行(朝日新聞社顧問)

◇常務理事 桑山朗人(日本対がん協会業務執行理事)、佐野武(がん研有明病院名誉院長) 間野博行(国立がん研究センター理事長)

◇理事 安斎隆(東洋大学理事長、セブン銀行特別顧問)、菅野雅子(あずさ監査法人専務理事)、茂松茂人(日本医師会副会長)、高橋都(日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事)、角田克(朝日新聞社代表取締役社長)、藤戸方人(生命保険協会副会長)、山本真希(資生堂秘書・渉外部長)

◇監事 茂木浩一(朝日新聞社常務執行役員財務担当)、矢野拓也(公認会計士・税理士)

◇評議員 アグネス・チャン(歌手・タレント)、岸本葉子(エッセイスト)、坂下千瑞子(横浜市立みなと赤十字病院 緩和ケア内科部長・輸血部長)、佐川元保(東北医科薬科大学呼吸器外科名誉教授・客員教授)、佐々木常雄(東京都立駒込病院名誉院長)、中釜斉(国立がん研究センター名誉理



新常務理事に就いた桑山朗人氏

事長、日本医療研究開発機構理事長、中川恵一(東京大学医学部附属病院放射線治療部門 顧問・病院診療医)、中川晴美(東日本旅客鉄道常務取締役)、中野厚夫(予防医学事業中央会専務理事)、中村史郎(朝日新聞社取締役会長)、野田哲生(がん研究会がん研究所名誉所長)、藤澤武彦(千葉大学名誉教授、ちば県民保健予防財団理事長)、松浦成昭(大阪国際がんセンター総長、大阪対がん協会会長)、山口建(静岡県立静岡がんセンター名誉総長)、山本秀樹(日本歯科医師会常務理事)

2026年度がん検診研究助成 公募開始

日本対がん協会



日本対がん協会は6月、2026年度「がん検診研究助成事業」の公募を始めた。がん検診に関する研究課題を募り、優れた研究に対して助成金を支給する。新たながん検診の技術につながることを目指した基礎研究や臨床研究をはじめ、がん検診の普及啓発のための手法の開発、課題を探索する社会調査など、幅広い分野が対象になる。

がんは1981年以降、日本人の死亡原因の1位であり、がん検診は重要な対策の一つ。公募の対象は、【分野1】基礎研究(がん検診技術の開発に向けた基礎研究等)▽【分野2】臨床研究(がん検診研究の基礎から臨床への橋渡しの研究等。企業が実施する治験などは対象外だが、医師主導治験は対象)▽【分野3】がん検診の受診率や質の向

上、普及啓発に向けた手法の開発、社会調査等——で各分野からバランスを考慮して採択する。1件当たり300万円を上限として総額3000万円を助成する。

応募資格は国内の大学や研究機関、医療機関、対がん協会支部に所属する研究者及び医療従事者(医師、看護師、薬剤師、技師、管理栄養士、放射線医学物理士、実験動物関係技術者、公認心理士、臨床心理士等)。ただし、過去3年以内に喫煙に関係する団体から助成を受けた者を除く。応募の締め切りは8月31日。

詳しくは協会サイトの特設ページ(https://www.jcancer.jp/screening_grant/)で。専用フォームから申請、2023年の開始年度から過去の採択結果を確認できる。



みんな知っている？たばこのルール

世界禁煙デー、厚労省などが催し



世界禁煙デーの催しで登壇した参加者たち

受動喫煙、マナーではなくルールで対処を

5月31日～6月6日は「世界禁煙デー」——。厚生労働省などは5月31日、東京都千代田区で世界禁煙デーを記念するイベントを開いた。テーマは「みんな知っている？たばこのルール」。催しの講演では受動喫煙についての知識の共有があり、パネルディスカッションでは企業や自治体などの職員とともに禁煙に向けた社会づくりにむけての取り組みを紹介した。会場とオンラインで計220人が講演に聞き入っていた。

「世界禁煙デー」は、世界保健機関（WHO）が、「たばこを吸わないことが一般的な社会習慣になること」をめざし1989年に制定した日。厚労省は1992年から世界禁煙デーから始まる一週間を「禁煙週間」としてたばこの健

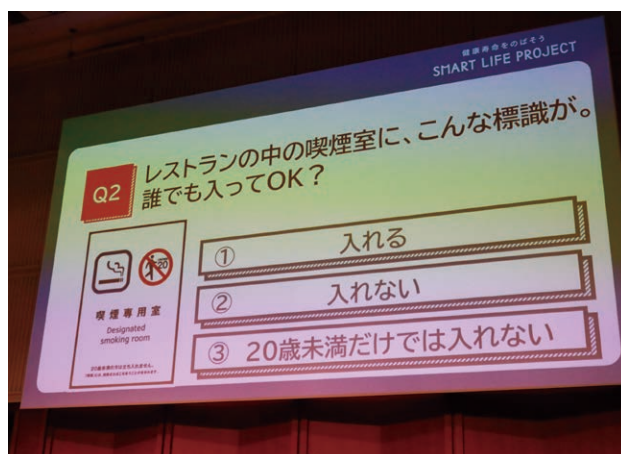
康影響等の普及啓発を強化する期間として取り組んでおり、事務局によると今回の催しは13回目という。

催しでは、公益社団法人「地域医療推進協会へき地医療研究センター」アドバイザーの中村正和さんが基調講演。中村さんは、改正健康増進法（2020年全面施行）では公的施設や職場ではたばこ喫煙についての罰則があるといい、「受動喫煙を受けやすい場所である家庭と職場で防ぐのが非常に重要。

家庭の喫煙には罰則はないが、配慮義務がある」と語った。そのうえで、「禁煙はマナーではなく、ルールが必要」と強調し、たばこの「受動喫煙の他者危害性」「対策のニーズ」「マナーの限界」を挙げて、社会全体で解決を図る必要性を訴えた。

その後にあったパネルディスカッションでは、タレントのハリー杉山さんがモデレーターとなり、厚労省健康・生活衛生局の堀岡伸彦健康課長、「オムロンヘルスケア」の行方純一・健康経営推進グループリーダー、東京都調布市の西沢祐樹・健康推進課長補佐がいまの社会に求められることを話し合った。

行方グループリーダーは、就業時間の禁煙やセミナーなどを通じた社内のヘルスケア禁煙施策を説明し、喫煙者が減った成果を発表。調布市の西沢課長補佐は、市立施設や公園・広場・緑道などの禁止区域の指定や、落語を通じた小中学生を対象とした啓発活動の取り組みを紹介した。



会場ではクイズ形式で禁煙への理解を深めていた

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

charibon by VALIE BOOKS

詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/jcs/>
(ISBNのバーコードがついた書籍類が対象です)

お問合せ(株式会社バリューブックス): 0120-826-295
受付時間: 10:00-21:00(月～土) 10:00-17:00(日)

ハリー杉山さんが語る父とタバコ

「おやじの生き様でも、やめてと言った」

厚生労働省などが主催する世界禁煙デーの催しで昨年からモデレーターを務めるハリー杉山さんの父は、英国人ジャーナリストのヘンリー・スコット・ストークスさん(2022年死去)。ハリー杉山さんは催しで子供時代の思い出として「夜遅くに疲れ果てて仕事から帰った父は、ウイスキーとあのタバコの煙い香りがした。おやじの生き様だから言っちゃいけないと思ったけど、やめて欲しいと言った」と語っていた。モデレーターを務める今の思いを聞いた。

父は「卒煙者」

——お父様がジャーナリストで、スモーカーだった。

父は、イギリスの経済紙「フィナンシャル・タイムズ」の記者として、1964年の東京オリンピックを世界に伝えるために日本にやって来ました。その後、米ニューヨーク・タイムズ紙の東京支局長を務めた。僕が生まれたのは支局長になっていた父がフリーに転身して2年目でした。

僕が5～6歳の時、50歳を過ぎた父はタバコを好きで吸っていたというよりは、記者仲間と一緒に吸っていたという印象だった。オールドスクールなイギリス人らしい全身ツイードを身にまとった、僕にとっては親友のような父親だった。

——タバコを吸われていたのは嫌だった。

シンプルに、においが臭かった。仕事からお父さんが帰ってきたらハグしたいし、親父のひざ元で寝ることが好きだったので、これはきついなと思っていた。なので、生き様だったと思うが、「いい加減やめてよ。身体にいいはずないよね」って伝えていた。

僕は11歳でイギリスに留学し始めたが、父はもうこのタイミングではほとんど吸っていなかった。たまに吸うことがあったが、僕がイギリスで受けた義務教育のクラスで、タバコを吸っ

ていた方で、肺がんと向き合っている方の肺の模型をみて、グラフィックで写真もみて、「こんなことになってしまうのか」と感じた。それを父親に話したのが一番父親の心を動かしたと思う。それから父は完全に禁煙していました。「卒煙者」という表現が正しいかな。

受動喫煙「危険だった」

——タバコの子供への悪影響を感じた。

生活面では父がタバコをやめてからボールと一緒に蹴ったり、長く走れるようになったりというのは鮮明に覚えている。周りの人が吸うたばこの煙を吸ってしまう「受動喫煙」のデータは去年から見始めて、当時自分は子供ながらに危険に冒されていたというのを感じた。イギリスでは受動喫煙はパッシブスモキングというが、データは触れたことがなかった。

——昨年から世界禁煙デーの催しでモデレーターを務めている。

今年も受動喫煙がどう社会に対して悪い影響を与えているのか、ルールをどこまで浸透することができるか、そのスピード感も含めて具体的なディスカッションをしていきたいという思いで取り組んだ。

大切な仲間のなかでも肺がんと闘っているひとであったり、近いところにいる方の抗がん剤との闘いであったり、がんが転移した後の日常を見たりしているのが、自分が父親になる時には最低限の教育としてはその道は進むなど強く言うってしまうかもしれない。

実は僕自身、20代前半のロンドン大学時代にはスモーカーでもあって、親父と同じようにたばこを吸う時期があった。吸うのが好きというよりは、吸っている自分がかっこいいと思っていた。親父には「吸うな」と言っておいて、自分自身に対して嫌悪感もあったが、自分もソーシャルスモーカーになっていた。イメージとして、自分を大



はリー・すぎやま

1985年東京生まれ。11歳から英国で学びロンドン大学に進学。日本語、英語、中国語、フランス語を操る。タレント、リポーター、俳優など多方面で活動している。

きくみせようとしていた。広告とか映画とかでかっこいいなと心をもっていた。

——それは大学時代だけですか。

そうですね。日本に帰ってきて、芸能のキャリアをスタートするが、サッカーが好きというところと、近年はフルマラソンに人生をかけている。だから、悪影響のあるたばこの煙がある空間にはできるだけいかにないようにして飲食店も選んでいる。

——催しのなかで、ハリーさんは「飲食店の経営者にとっては、常連のひとが吸っていた場合にどうすればよいか」と投げかけていた。禁煙は進んでいるが、一部店舗はまだ残っている。社会的な現実と折り合わせてどう伝えればよいと思うか。

日本では、美しい「空気を読む」という文化がある。自分にとっての支えであった常連のみなさんにやめて欲しいと伝えるのは難しい。ただし、そういった店主のみなさんにグラフィックなどで「たばこを吸うと、肺がんという病気ではこうになってしまう」というように、自分にとって大切なひとたちに受動喫煙でどれほど危害を与えるかをわかっていただくと、「本当に申し訳ないんだけど」という気持ちで必然的に常連のひとにも言えるようになっていくと思う。

若手医師が米テキサス州MDアンダーソンがんセンターへ

RFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞授賞式

がん患者・家族を励まし、地域全体でがん征圧をめざすチャリティ活動リレー・フォー・ライフ(RFL)の寄付金を、地域のがん医療の充実と若手医師の育成に役立てようと、海外研修費を助成するマイ・オンコロジー・ドリーム(MOD)奨励賞の2025年度授賞式が5月28日、東京・築地の日本対がん協会本部で開かれた。受賞した消化器外科の医師2人は、全米有数のがん専門病院であるテキサス大学MDアンダーソンがんセンターで1年間研修する。



今年度のMOD奨励賞を受賞した今村泰輔医師(手前左)と、大淵昂医師(手前中央)

今年度受賞したのは、京都府立医科大学消化器外科の今村泰輔医師と、熊本大学大学院消化器外科学の大淵昂医師の2人。授賞式の冒頭、日本対がん協会の梅田正行理事長は「研鑽を積まれることはがん患者さん、ご家族、支援者の悲願でもある。膨大な知見が蓄積された研修が、お二方が医師として、研究者として社会に貢献される糧になると信じている」と述べ、その後、日本対がん協会の垣添忠生会長から奨学金授与証が贈られた。

この日は、受賞者からの助成や支援

者への感謝の言葉も述べられた。

今村医師は、自身の臨床研究や遺伝子構造を分析する「日本版ゲノムアトラス」での経験を紹介。昨年も今回の賞とは別で3か月、MDアンダーソンがんセンターに留学し、ロボット支援の手術やAIの手術動画の解析、患者中心の価値評価の研究などに携わっていたといい、「またこのような機会を頂いたことを励みに、これらの研究を発展させるために努めてまいりたい」と話した。

大淵医師は、医師10年目で昨年学

位を取得したと自己紹介。「外科診療のなかで治らない患者さんの現実を目の当たりにして、なぜ治らないのかと大学院に進み、研究に励んでいた」といい、「何

マイ・オンコロジー・ドリーム(MOD)奨励賞

一般社団法人オンコロジー教育推進プロジェクト(東京)の協力を得て2010年に創設された。地域のがん医療の充実を図るため、日本対がん協会と全国各地の実行委員会が主催するリレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)への寄付金をもとに、米国のがん専門病院で若手医師が研修を受けるための費用の一部を助成している。助成では、2024年度までに25人の若手医師を米国に送り出してきた。

かしらの結果が出て形になるのは非常にうれしく、患者さんにも還元される可能性がある。この研修のチャンスを逃さないように、今後精進して日本のがん診療に貢献したい」と話した。

現地からお祝い

垣添会長は祝辞で、「日本から海外に出る若い医師が減ってきているという大きな問題があるが、お二方は手をあげてこ



祝辞を述べる日本対がん協会の垣添忠生会長

られて、今回受賞されたということは本当にめでたいこと」と述べた。その上で、「お二人にお願いしたいのは、まず英語に慣れること。しっかり身につければ一生の宝になる。それから、アメリカは非常に広大な国。テキサスだけではなく、景観も、人間も、風土



今村医師と大淵医師には垣添会長から奨学金授与証が贈られた

も違う場所を訪ねて下さい。それから三つ目は同世代の友人と生涯にわたるような友情を培ってください」と話した。その後、MOD創設に協力したハワイ大学がんセンター長腫瘍内科の上野直人氏からの祝辞があり、二人が所属するMDアンダーソンがん研究セン

ターの研究室からのビデオメッセージも上映された。

RFLJ実行委員会を代表して、RFLJ静岡実行委員会の三室さつき事務局長は「全国の実行委員会を通じて寄せられた大切な寄付金がこうして先生方の未来へと引き継がれる本日、お会いで

きて大変うれしい。先生方の研究が大きな実を結び、未来の患者さんたちの前にさらに希望に満ちた景色が広がることを私たちは確信している」と話した。



2025年度受賞者の抱負



今村 泰輔 医師

京都府立医科大学
消化器外科

私は京都府立医科大学消化器外科にて、肝胆膵悪性腫瘍を中心とした外科診療に従事してまいりました。肝胆膵領域の手術は高難度かつ高侵襲であり、たとえ手術を乗り越えても、依然として予後不良な疾患が少なくありません。治療侵襲や病状進行により、日常生活への復帰に時間を要したり、十分な補助治療に進めない患者さんを数多く経験してきたことが、外科医としての私の原動力となっています。

近年、ロボット支援手術をはじめとする低侵襲手術は飛躍的に発展していますが、手術の質や安全性、さ

らには術後の生活の質(QOL)をいかに高めていくかは、依然として大きな課題です。私はこれまで、ロボット支援下膵頭十二指腸切除術を中心に、手術手技の標準化や術後症状・QOL評価に関する臨床研究を進めてまいりました。

今後は、米国MDアンダーソンがんセンターでの研究機会を通じ、豊富な手術動画データや臨床情報を基盤として、Artificial Intelligence(AI)を活用した手術支援、外科手技評価、ならびに予後予測モデルの構築に取り組みたいと考えています。AIによる客観的な手術評価は、術者の経験に依存しがちな外科医療を次の段階へと進め、より安全で再現性の高いがん治療を実現する可能性を秘めています。

本奨励賞によるご支援を糧に、患者さん一人ひとりのその後の人生に寄り添う外科医療の実現を目指し、研究と臨床の両面から挑戦を続けてまいります。



大淵 昂 医師

熊本大学大学院
消化器外科学

私は消化器外科医として、消化器悪性腫瘍の診療に携わると同時に、がんの進展機構や予後規定因子を解明するトランスレーショナルリサーチに取り組んでまいりました。日常診療において、根治切除が行われたにもかかわらず早期再発を来し、十分な治療に進めない患者さんや、治療によって生命は救われても生活の質が大きく損なわれてしまう患者さんを数多く経験してきました。こうした臨床経験が、私の研究の原点となっています。

これまで私は、消化器癌を対象に、臨床検体とオミクス解析を統合した研究を行い、新たな腫瘍促進因子

や予後因子を同定してきました。近年は、分子レベルの理解を臨床に還元し、治療選択や予後予測に直接貢献できる研究の重要性を強く実感しています。今後のがん診療では、単に生存期間を延ばすだけでなく、患者さん一人ひとりの背景や希望を尊重した「患者中心の医療」がますます求められると考えています。

今回の奨励賞により、米国MDアンダーソンがんセンターで研修する機会を得ました。同施設には世界最大規模の臨床・研究データが集積されており、基礎研究と臨床研究が密接に連携した環境が整っています。この恵まれた環境で、がんの分子基盤に基づく新たな診断・治療戦略を学び、日本のがん診療に還元できるエビデンスを創出したいと考えています。

本奨励賞で得られた学びと経験を、帰国後は日本の医療現場に確実に還元し、がん患者さんの生存率向上と生活の質の改善に貢献できる外科医・研究者として成長していく所存です。

リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2026 ところざわ

がん征圧めざし、各地から有志集う

がん征圧とがん患者支援のために行われるチャリティーイベント「リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)2026 ところざわ」(ところざわ実行委員会と日本対がん協会主催)が5月23日、埼玉県所沢市の所沢航空記念公園で開かれた。会場では医師による講演や地域の楽団による演奏などがあり、全国各地から集まったがん患者ら約250人が交流を深めていた。

所沢市での開催は6回目で、患者団体や企業など12チームが参加。会場には茨城、長野県の実行委員会などがブースで出展したほか、秋田、静岡、兵庫県などほかの地域のリレーヤーも来場し、お互いの近況を報告しあった。

この日は、開会の冒頭で角田潤弥実行委員長(50)があいさつ。自身が希少がんの「GIST」の経験者であることや、父を今年3月にがんで亡くしたことを明かし、「毎日考えない日はありません。これががんという病気です。



催しの恒例となる「サバイバーズ・ラップ」ではがん経験者らが会場を歩きまわった。

こんな悲しい思いを減らしていきたい」と、活動の意義を語った。

ステージ特別講演では、「乳がんセミナー」として埼玉石心会病院の児玉ひとみ副院長が講演。日本対がん協会の「がん相談ホットライン」の相談支援室の北見知美マネージャーが寄付金の使

途やがん相談の現状について話した。

リレー・フォー・ライフは「がん征圧とがん患者支援」のためのチャリティー活動。1985年、アメリカの医師ががん患者支援のため24時間走り続け、寄付を募ったことを契機に全世界で広がり、今年度は52か所で開かれる。

日本対がん協会、大規模な漏水による被災について

6月上旬に弊会のオフィスが入居している東京・築地のビルで大規模な漏水が発生し、オフィスの大部分が被災しました。メールは被災後も受け付けておりましたが、「がん相談ホットライン」をはじめ代表電話も不通になるなど、業務に支障を来す状況が続いておりました。

がん相談ホットラインは6月3日から臨時休業をしていましたが、近隣に仮オフィスを設け、22日に再開いたしました。ご利用をお考えの皆様にはこの間、多大なご不便とご迷惑をおかけしましたことを、心よりお詫び申し上げます。

代表電話(03-3541-4771)は6月10日に開通。その後も通信機材などの整備を続け、仮オフィスのため一部制約はあるものの、代替手段を講じながら順次業務を再開しております。郵便物は、これまで通り事務局住所宛にお送りいただければ確認できる状態となっております。

今後も「がんで苦しむ人や悲しむ人をなくしたい」という想いで、ご不安なお気持ちを抱えた患者さんやご家族のお力になれるよう励んでまいります。何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

がん相談ホットライン 03-3541-7830

毎日受け付けています

【受付時間】 10:00~13:00 15:00~18:00

社会保険労務士による「がん就労」電話相談の予約はインターネットの専用フォームで受け付けます。がん専門医による相談は今年度休止します



社労士による電話相談

電話がつながりにくいことがあります。何卒ご了承ください